

(講談社選書メチエ・16880円)



木村俊道著

文明と教養の〈政治〉

現代はデモクラシー全盛の時代である。デモクラシーに真っ向から挑戦するような政治勢力は、一部の独裁国家を除けばもはや存在しない。しかし、果たしてデモクラシーが理想の「政治」なのだろうか。デモクラシーによって失われたものはないのだろうか。デモクラシーが確立する以前、シエークスピアが活躍したころの初期近代のヨーロッパ政治に立ち返りながら、筆者はこうした問いに向き合っていく。

政治とデモクラシーは決して同一のものとは限らない。本書が光を当てるのは、初期近代の「文明の作法」と「実践知」に基づく政治構想である。この時代の「文明」とは、人間の所作や振る舞いに関わり、礼儀や作法の洗練をその要素としていたと筆者は語る。その作法とともに政治の営みを支えていたのが、人文主義的な古代古典の教養に基づいたレトリックと思慮という「実践知」である。

デモクラシーが確立し、科

学が絶対視される時代になると理性や合理性が重視され、文明の作法や実践知は表舞台から消えていく。理性的な討論や公論によって形成されるデモクラシーの政治と対比すると、筆者が取り上げた作法や教養に基づく過去の政治は、古めかしく、感性的、時には権威的にすら映るのかもしれない。デモクラシーとは人々に作法を与えるものではなく、人々を作法から解放するものだからである。しかし、作法から解放された私たちは幸せだろうか。むき出しの暴力と感情の発露を抑え、他者との交際を可能にする術が作法や教養のなかには隠されているのではないだろうか。

人間は万能ではない。他者との対話は容易ではなく、苦痛ですらある。理性や合理性で割り切れないことも多い。そうしたとき、対話不可能な相手との対話を可能にする技術のヒントが、「文明の作法」にあるのではないだろうか。経験や伝統に基づいた作法は一見堅苦しく見える。しかし、そうした堅苦しきの中にこそ、真の自由があるのかもしれない。

(九州大准教授・政治学 大賀哲)

きむら・としみち 1970年生まれ。九州大学大学院教授。著書に『文明の作法』。